



異世界転生性活

基本CG12枚
総枚数166枚
もちもち堂

日常が……ただ何も変わらずに
過ぎていく日々が退屈だった。

だからなのだろう。

突然目の前に現れた怪しい男の
誘いに乗ってしまったのは。

『もし君が望むなら、異世界に
転生させてあげるよ』

普通こんな事を言われれば怪しむし
避けようとするだろう。

だけどバカな俺は、知らない…新しい
何かにワクワクする気持ちを抑えきれず、
深く考えもせずにその誘いに飛びついて
しまった。

何の根拠もなく物語の主人公のように
自分ならどうとでもなると思い込んで…。

それが今のこの結果という訳だ。

今の俺は奴隷商人たちが開催している
競売の商品として並べられている。

世の中俺が考えていたような都合のいい
話なんてあるわけがなかった。



アニメや小説の異世界転生のようなチートなど何もなく俺は女の体に転生させられ、気付けば荒野に裸で放り出されていた。

ただ運が良いのか悪いのか、たまたま通りかかった奴隷商人に捕まったおかげで、そのまま野垂れ死ぬことはなかったが。



自分の浅はかさと後悔の念に泣きそうになるが誰も助けてなんてくれない。

当たり前だ。本当の俺の事を知っている人間なんて、ここには誰もいないのだから。



(まあ、奴隷商人に捕まらなかったとしても俺はこの世界のことを何も知らないし、詰んでいただろうけど)

(不幸中の幸いは言葉は通じるってことだけだな)



意味のない考えで現実逃避をしている
俺をよそに競売はどんどん進んでいく。

どうやらとうとう俺の番が来てしまった
ようだ。

真上から当てられるライトの光が眩しく
目を細めてしまい、同時に辺りから聞こえる
沢山の声のせいで誰が俺を買おうとして
いるのかよく分からない。

どっ



周りが盛り上がるにつれ、今更ながら
恐怖で足が竦んでしまう。

おそらく性奴隷として買われるのなら
まだ幸運な方なのだろう。最悪、遊び半分
で殺されることだって十分に考えられる。

どっ



（……ああ、どうして俺はあんな馬鹿な選択
をしてしまったのだろう。もし過去に戻れ
るなら殴ってでも止めているのに）

競売で熱狂する男たちの声を聴きながら
俺はこれから訪れるであろう自分の未来に
悲観し、もう何も考えたくなくなってしま
った。



「……はず、だったんだけどな」

二年前に行われた自分が売買されていた競売のことを思い出しながら、仕事着として着用している仕立ての良いメイド服のスカートを摘み上げる。

もう何度も着ているはずなのに、いまだに自分が女物の服……それもメイド服を着ているなんて可笑しく思ってしまう。



そう：俺は今、化け物：モンスターや魔法が
存在するらしいファンタジーの世界で、
この町の領主の元『アニー』と言う名前を
付けられ、メイドとして働いているのだ。

（…まあ、町から出たことはないから
モンスターなんて見たこともないけどね）



現代で男として暮らして来たので最初の
うちは仕事もあまり上手くいかず失敗
ばかりしていた。

けれどもメイドの先輩たちは俺が出来る
ようになるまで根気よく教えてくれたの
で想像してたよりも早くこちらの生活
にも慣れることが出来た。



ただ、覚えることが多すぎて最初の一年は
あっという間に過ぎ、帰る手段を見つける
ことの出来ないまま気付けばこの世界で
二年も過ぎ、今では一人前のメイドに
なってしまったが。

正直こんなのは望んでいた生活ではない。
だが、それでも俺は恵まれているのだろう。
知り合いもいない土地で腹を空かす
こともなく、こうやって安全に生活
することが出来ているのだから。



それでも一つだけ今の生活に文句があるとすれば俺の主人になったおっさんの夜の相手をしないといけない事だ。

どんなに嫌でもここを追い出されたら後がないので逆らうことが出来ない俺はおっさんの相手を嫌々していた。

：そう、そのはずだったのに。



「…あむ♡ちゅぶ♡ちゅ…れろお♡」

俺は慣れた様子で丹念に舌を這わせながら主人であるおっさんのイチモツを舐め上げる。

ここに来てから何度も繰り返した行為なので、何処をどうすればおっさんが喜ぶのかなんで、もう覚えてしまっていた。



正直、男の相手なんかしたくない。

けれども人間とは不思議なもので
何度も体を重ねていくうちに情の
ようなものが徐々に芽生えてしまう。

…いつの頃からか俺はこのおっさんが
相手なら渋々でも受け入れてしまっ
ていたのだ。



けれど、俺がそうなってしまった原因は
おっさんにもあると思う。

何故なら俺の主人であるこいつは
俺にだけは異様に甘いからだ。



例えば口の利き方。

夜の相手をしているとき以外は
ちゃんと敬語を使っているとはいえ。

それ以外の時の口の利き方やおっさん扱い
をしていることに対しても俺は一度も怒ら
れたことがないのである。



普通こんな事をすれば罰が与えられてもおかしくないはずなのに。

おっさんは公式の場でさえ気を付けるのならこのままで構わないとさえ言うしまつなのだ。

どん

こうやって他とは違うという明確な特別扱いをされ続けられれば、誰だって少しは好意を持ってしまうだろう。

ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ



(…うん、だから俺がおかしい
ってわけじゃないよな)

俺は自分にそう言い聞かせながら
舌の動きを止めず熱く脈打つ
おっさんのイチモツに奉仕を続ける。

どっ

ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

はぁ♡



「はむ…っ♡ちゅぶ♡れろ…れろ♡
ちゅ…っ♡ちゅる、ちゅるる♡」

「う…っ！熱い舌がニユルニユル絡み
付いて…っ！う、くっ、気持ちいいぞ
アニー」

ズン

「じゅぶっ♡ちゅ…じゅる♡
はあ…♡はあ…♡うっさい…！」

「あむ…ちゅる♡相手なんて俺以外にも
いっぱい、いる癖に。毎回毎回俺の所に
来やがって…こんなデカイのを相手に
するこっちの身にもなれよな！」

ちゅぶ
ちゅぶ

「そんなこと言いながら一生懸命、ご奉仕
してくれるアニーが私は好きだぞ」

「…っ！す、好きとか変なこと
いきなり言っくなよな！」

「ごめん、ごめん。
でも、嘘は言ってないよ？」





恥ずかしさを隠すようにじゅぶじゅぶと
下品に音を立てさせながらイチモツを
飲み込んでいく。

口いっぱいに広がる雄の臭いと味に
何故か頭がクラクラとしてしまう。

ビッ

アッ
アッ

ん
く
ッ

「う、お！おおっ♡そんないやらしく
チンコに吸い付いて…っ♡」

「く…うつ♡下品なフェラ顔を晒してる
姿も、やっぱり最高に可愛いぞアニー♡」

くぽ♡

くぽ♡

びん

ヌク
ヌク♡

「ふえんなふおというなあ♡」

「お、おおっ♡もごもごされながら
喋られるのも気持ちいいっ♡」

「…っ！もう、無理だ。」

「このまま口の中に出すぞ！」

びゅぶ、びゅぶるるるるっ！

(うーっ♡うくうっ♡ドロドロの

あっつい精液が喉に絡みついで…っ♡)

(やばっ♡精液飲まされて体が勝手に
イっちゃまう…っ♡)

くほ♡

くほ♡

びゅっ



「…んぶ、んっ♡んぶ…ねろっ♡んく♡
濃いのがいっぱい…♡毎日処理して
やってるのに、なんでこんな飲み込め
ないくらい出すんだよ」

「そんなのアニーとしてゐるからに
決まっているじゃないか。…ほら、まだ
全然し足りなくて勃起が収まらないんだ」



「…あほ。そんなに見せつけなくても
こんなビクビクしてるのに分からない
わけないだろ」

ビクッ

うう…





「…ほら、もう濡れちゃってるから
そのまま入れちゃっていいぞ♡」

「っ！アニーっ！」

ビクッ

ドキ
ドキ♡

そんな俺の仕草に我慢出来なくなったのか。おっさんはガチガチに勃起したイチモツを押し当てると勢いよく挿入する。

ケ

「んっ♡ふうっ♡…んく♡」

熱く滾った異物が奥へ奥へと入れられ
内側を広げ掻き分ける感触は何度経験
しても慣れるものではなく、口からは
艶声が漏れてしまう。

はぁ♡

Love



「ふくうっ♡ん…うっ♡ん、んっっっ♡」

ただの女のように感じている姿を見せ
たくなく。押し寄せる快楽に耐え、必死に
声を抑えようとするが。

その姿が余計におっさんを興奮させた
のか、先ほどよりも腰の動きが二層
早くなってしまう。





「ひぐっ♡あ、ああっ♡深いとこ…おく、
コンコン突かれて…っ♡あっ♡あ、ああっ♡
う、くうっ♡気持ちいの止まらない…っ♡」

「アニーの体、吸い付いてくるみたいになんて柔らかくてずっと触っていたくなる」



「ひ、うっ♡おっぱい揉みながら、
いやらしいこというなあ♡」

「あっ♡…ああ、ん…っ♡
す、吸うのも、だ、めえ…っ♡」

はあ♡

あああ♡

ズン
ズン

発情しきった体は俺の意志とは無関係に
愛液を更に溢れさせ、まるでもつとして
欲しいと言わんばかりにイチモツに
甘く絡みつき締め付ける。



「く、うっ♥アニーのキツキツおまんこ
精液欲しいってキュウキュウ締め付けてっ」

「はあ…はあ…♥んくっ♥」

「おっさんの…中でビクビク膨らんでっ♥
ふあっ♥あっ♥出されちゃうっ♥いつも
みたいに中にいっぱい出されちゃう…っ♥」

はあ♥

ズパ
ズパ

んん

んん

「ああ、出すぞ、アニーっ！
もう…っ、でるう…っ！」

思いつ切り腰を押し付けると同時に
熱くドロドロとした精液が子宮内に
射精される。





「お、おおっ♥なかに、あつついのが
いっぱい…っ♥ひあっ♥んくう…っ♥
おっさんの精液子宮に染み付いちゃう
よお♥」

はあ♥

あああ♥♥♥

はあ♥♥♥

ぐわ♥

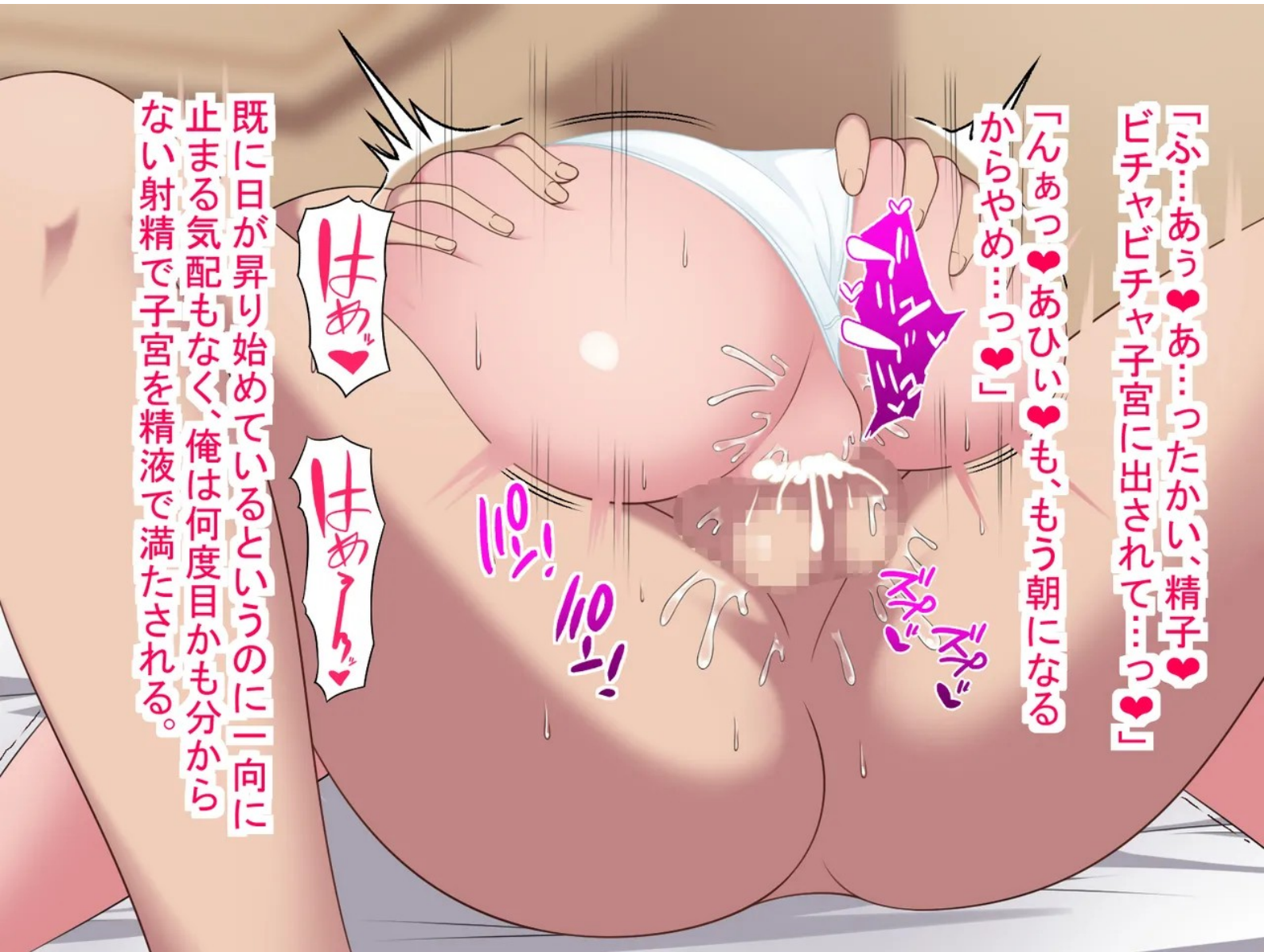
「ふ…あう♥あ…ったかい、精子♥
ビチャビチャ子宮に出されて…っ♥」

「んあっ♥あひい♥も、もう朝になる
からやめ…っ♥」

はぁ♥

はぁ♥

既に日が昇り始めているというのに一向に
止まる気配もなく、俺は何度目かも分から
ない射精で子宮を精液で満たされる。





「あくう♡…は、ああっ♡だし、すごい♡」

「ふ、あ♡溢れた精液ごとマンコぐぼぐぼ

掻き回されて…っ♡ひうっ♡あっ♡
ああっ♡なか、じんじんするう…っ♡」

あ
あ
あ

グ
グ
グ

ん
ん
ん

ん
ん
ん

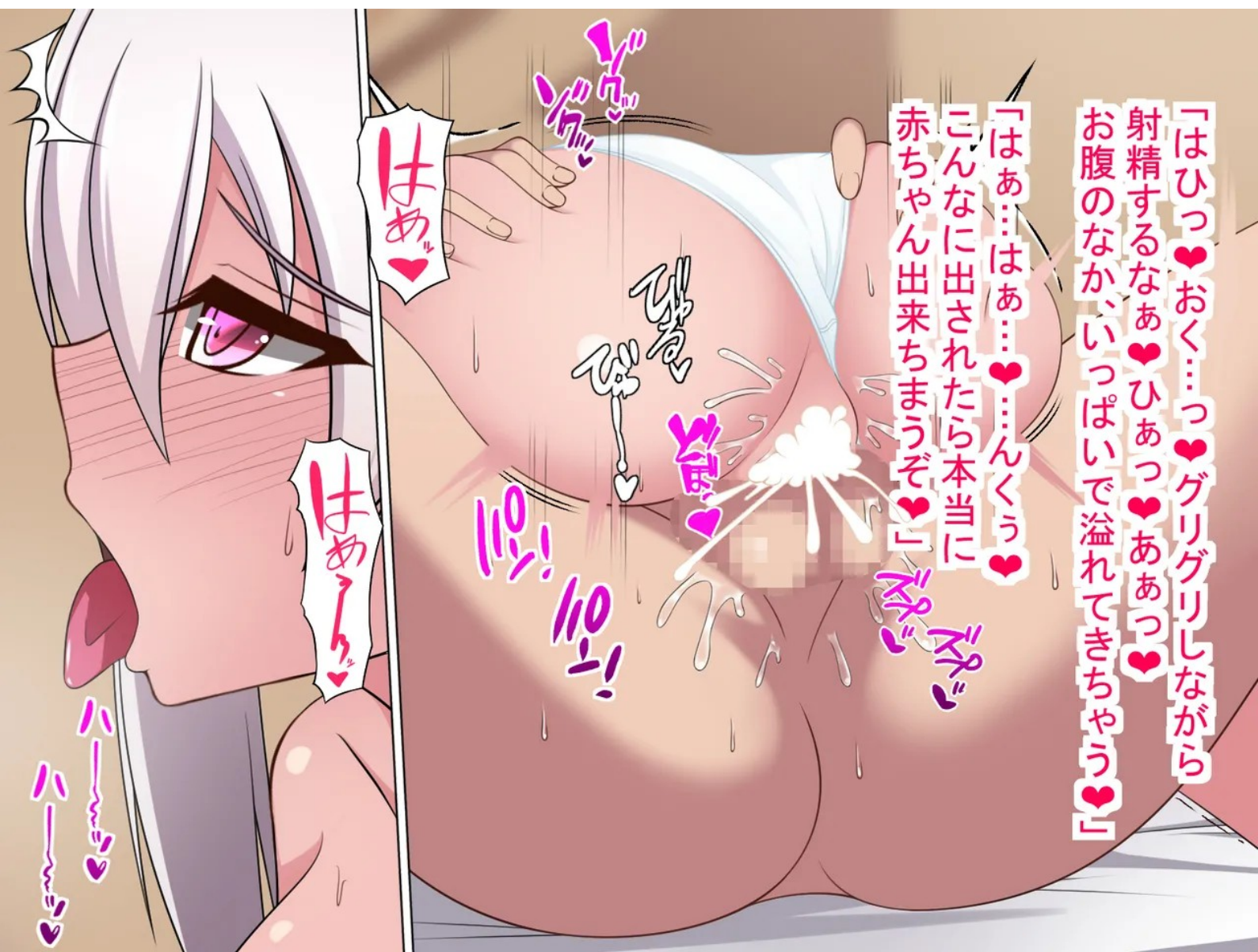
ん
ん
ん

ハ
ハ
ハ

「アニーの中、気持ちよすぎて何回出しても飽きないぞ!」

そう言いながら、おっさんは腰を大きく突き上げると。既に満たされた子宮に新しい精液を注ぎ込んだ。







「…何だこれ？」

おっさんの部屋を掃除中、本棚に隠すように
入れられていた古い写真立てを見つけた。

隠していたもの…それも自分の主人である
人の物を勝手に見るのは流石に不味いとは
分かっていたが。俺は好奇心を抑えきれず
それを取り出して見てしまった。



(……そっか、そう言う事か)

写真に写っていた自分にそっくりな人物とそこに添えられた『我が最愛の母』という言葉に、ようやく前から疑問だったことが分かった。

(……だから、なのかな？
おっさんが俺にあんなに甘いのは)



おっさんは亡くなったこの人の面影を
俺に求めていたのかもしれない。

普通なら誰かの代わりにされている
なんて知れば怒りや嫌悪感を抱くのだろう。

でも俺はそれでも別にいいと思えてしまった。

たとえ誰かの代わりでも自分を求めて
くれることに嬉しさを感じてしまったからだ。

初めて自分からおっさんを部屋に誘って
しまった。俺は緊張と恥ずかしさを誤魔化す
ように自分から積極的に腰を動かしてしまう。

「何だか今日はやけに積極的なんだな」

「んっ♡なんだよ、せっかくサービス
してやってるのに嫌なのかよ。毎回避妊
しないであんなに出してるくせにさ」



「…いや、避妊はしているぞ。そうじゃなかったらとつくに子供が出来てるさ」

「いつもは君の部屋に来る前にきちんと避妊魔法をかけてるよ」

「…そっか、そうなんだ」



俺の言葉尻が小さくなる。

別に元々妊娠がしたかった訳ではない。
それでもおっさんのその言葉に少しだけ
寂しさを感じてしまった。

そんな俺の様子に気付いたのか。おっさんは
少し考える素振りをした後、俺の目を見つめ
とんでもないことを言い出した。



「もし、子供が出来たら君は心まで私のモノになってくれるかい？」

「…へ？」

「好きなんだ、アニー。だから君の身も心も私のモノになって欲しいんだ」



「えり! あ、その…いきなり
そんなこと言われても…」

顔中が真っ赤に染まっているのが分かる。
おっさんの告白に歓喜で胸がドキドキと
飛び跳ね頬がにやけてしまう。



「頼む…アニー。君が好きすぎて
たまらないんだ。私が出せるものなら
何でも出す…だから…っ！」

「ひあっ♡ああっ♡そんな何度も
言いながらズンズン突くなあ♡」

「うっ♡あくう♡だめ…っ♡子宮口につ
お腹の奥にちゅっちゅしないでえ♡」

はあ♡

ドキ
ドキ♡

あ
ああ♡

ふん
ふん♡

ぐい
ぐい♡

あ
あ♡



「はあ…はあ…♡あああっ♡やめ…っ♡
これ以上は気持ちよすぎて本当に
おかしくなるからっ♡」

俺のその言葉に先ほどまでのおっさんの
激しい動きがピタリと止まる。



はあ♡

ドキ
ドキ♡

あああ♡
あああ♡

はあ♡
はあ♡

どい
どい

「…もし本当に止めて欲しいなら
これ以上はしないよ」

「あ……」

何かを確かめるように覗き込んでくる
おっさんの瞳。多分「こ」で拒否したら
本当に止めてくれるのだろう。



(そうだよ。そうすればもう男に…
おっさんに抱かれなくてすむ。
最初はそれが望みだったじゃないか…)

そのはずなのに何故か喉の奥から
言葉が出てこない。

もう二度とおっさんに愛されないと
思うと心が苦しくてたまらないのだ。



…だから俺は自分の気持ちに正直になる
ことにした。

今まで見えないように奥の奥にひた隠しに
してきた感情に…。



「……あほ、ばか。ここまでされて
今更離れられるわけないだろ」

「やめちゃ、やだよ。このまま
ずっと離さないでずっと一緒にいてよ」



「んっ♡ちゅ、ちゅぶ…♡
はあ…♡ん…ちゅ♡」

軽く唇を唾んだ後お互いの舌を絡め
唾液を交換する。今までとは違う恋人の
ように愛しさを込めたキス。

それは頭の奥が痺れるように甘く
蕩ける感触で、俺は夢中になり唾液を
味わうようにさらに舌を入れる。



「れろ…♡あむっ♡ちゅぶ♡
ちゅる…じゅるるっ♡」

熱い吐息を吐きながら貪り激しくなる
それは今まで感じたことのない興奮と
多幸感を与えてくれる。

ちゅる
ちゅる
ちゅる



「クスクス♪ホントに元気だな♥
キスしただけで、またおつきく
なってきたぞ」

「いいぞ♥まだ出したりないんだろ？
もう俺の全部はおっさんの物だから
好きにしていんだぞ♥」

ラッ
ラッ
ちゅっ
ちゅっ



「ひうっ♡あっ♡あくうっ♡こんな、
はげしくされたらっ♡ん、あっ♡ああっ♡」

押し寄せるあまりの快樂の気持ちよさに
足を絡めしがみ付いてしまう。

前まではおっさんに抱かれるたび自分が
女だと自覚させられそうで嫌だったが
今は女であることが嬉しくてたまらない。

はめ♡

はめ♡

あめ♡





心まで愛し合うセックスが此処まで
気持ちいいとは思いませんでした。
おっさんも避妊無しの子作りセックスに
興奮しているのかいつもより激しく俺を
求めてくれる。



「んひいっ♡あっ、あうっ♡
やあ♡おく、響いて…っ♡」

「アニー、すごく可愛いぞ」

「…っ♡ば、かあ♡ばかばかばかあ♡
いま、そう言うこと言うの反則っ…♡」

はあ♡

はあ♡



「ひあつ♡あ、ああつ♡幸せすぎて
お腹の奥キュンキュンしてるう♡」

「ふあつ♡ああんっ♡子宮降りて
来ちゃってるよお♡」

んっ

んっ

あああ

時間を忘れ汗だくになりながらも
ようやく手に入れることのできた
幸せを感じながらお互いを求めあう。

「んっ♡あ、うっ♡おっさんの…膣内で
ビクビクおつきくなつて来て…っ♡
…ん、んっ♡」

「いいぞ♡このまま出して。

おっさんの精液で俺を孕ませて…♡」

「ああ、だすぞ！アニー！私の子を孕めっ！」





びゅぶ、びゅぶるるっ！

「ひぐうつ♡あつついのビチャビチャ子宮に入ってきて…っ♡ふあっ♡あ、ああっ♡おっさんの精子に卵子犯されちゃってるっ♡」

ビュルルッ♡

あゝあゝ♡



「…ふふ♡おっさんのちんこガチガチ
でまだまだ、し足りなさそうだな♡」

「実は俺もなんだ♡ほら、おっさんのちんこ
欲しくてオマンコえっちなお汁でトロトロ
になっちゃってる♡だから、な…♡」

自分から媚び腰を突き出す俺におっさんは
応え、まるで動物の交尾のような格好で腰を
激しく押し付ける。







（あ、ああっ♡気持ちいいの我慢しないで受け入れてるだけなのに…♡）
（ひぐうつ♡お、おっさんとの…♡好きな人とのセックス気持ちいい♡）
後ろから突き上げられる度、獣のような嬌声をあげてしまい、のめり込むように行為に没頭する。

「んっ♡ひうっ♡…んひいつ♡
おっさん…っ♡すきい♡」

「好きすぎておかしくなっちゃうよお♡」

「っ！ああ、私も好きだ！愛してるぞ！
アニーっ！だからこのまま中で
受け止めろっ！」



びゅぶ、びゅぶるるるるっ！

「ひぎゅっ♥あっ♥あぁっ♥んはあっ♥
これ、すごお…♥チンコ、子宮とちゅー
しながら、びゅーってあっついの中に
流し込まれて…っ♥」

「ん、んっっっっ♥感じすぎ、てっ♥
あたま、おかしく…んあっ♥あぁあぁっ♥」



お互いの想いを確かめ合ったあの日から
俺たちは部屋に引きこもり、ただひたすら
に子作りに励む生活を送っていた。

それこそ気を付けなければ寝食を
忘れてしまうほどに。

ぐい
ぐい

ぐん
ぐん
ぐん

う
う
う

は
あ
♡



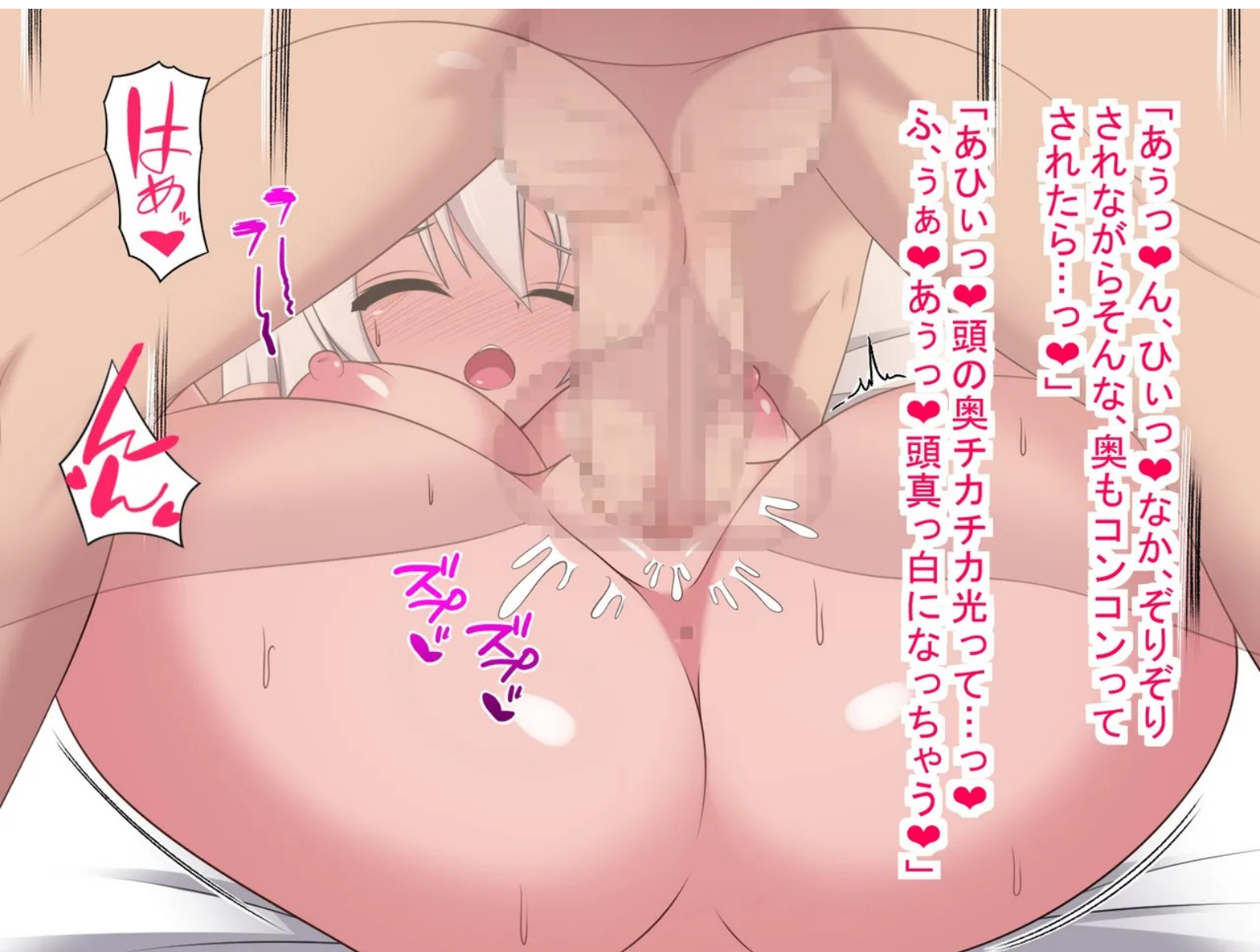
「あうっ♡ん、ひいつ♡なか、ぞりぞり
されながらそんな、奥もコンコンって
されたら…っ♡」

「あひいつ♡頭の奥チカチカ光って…っ♡
ふ、うあ♡あうっ♡頭真っ白になっちゃう♡」

ズビ
ズビ

はあ♡

ん♡



女の喜びに満たされ、体だけでなくまるで
魂の奥底まで染められる快樂の波に晒される。

なすがままにされ、絶頂するたびに口からは
甘い吐息と一緒に艶声が漏れてしまう。



「んっ♡んんっ♡全身がオマンコになった
みたいで…っ♡ひゃうっ♡あ、あっ♡
お腹の中、掻き回されて、イクの止まらないっ♡」

「私もっ！アニーのなか気持ちよくて…っ！
うくうっ♡また、なかでイクぞ！」

「うん♡おっさんの精子で赤ちゃんの部屋
いっぱいにして俺を孕ませて…っ♡」

ズ
ズ

は
あ

ん
ん



びゅるっ、びゅぶるるっ！

「ああっ♡あくぅ…っ♡赤ちゃんの素
子宮にいつぱい入って…っ♡」

精液を子宮に注ぎ込まれる度、快感と
多幸福感にゾクゾクと背筋が震え何度も
イってしまう。

ビュッ♡

ビュルルッ♡

ああ♡
ああ♡
ああ♡



「はあ…♡はあ…♡…ふふ♡こんなに
いっぱいしているんだし、もう赤ちゃん
出来ちゃってるかもな？」

「…どうだ？パパになるかも
しれない気持ちは」

はあ♡

♡はあ♡

はあ♡

はあ♡



「はは♪今からアニーとボテ腹セックスが出来るかも知れないと思うと楽しみで仕方ないよ」

「それに二人目が産まれたら直ぐに仕込んであげるから期待していてくれよ」

「…この、変態♡」

「はは♡」

「はは♡」

「はあ♡」



『数か月後』

俺は大きくなったお腹をかかえながら
おっさんとの生だしセックスを楽しん
でいた。



「んっ♡これ、すごっ♡赤ちゃんいるのに
ちんこ膣内挟るたび硬く、太くなつて…♡」

「んっ♡は、あっ♡妊婦相手に
こんなに興奮しやがって
ホント変態だなおっさんは♡」

「はは♪私はパパとママが仲良し
だつて産まれてくる子に教えて
上げたいだけさ」

はあ♡

んっ♡





おっさんはそう言いながらガチガチに勃起したイチモツで激しく膣内を抉る。

正直妊婦相手にするような動きではないが俺の体は喜んでそれを受け止め、膣内は精液を欲しがりキュウキュウと締め付けてしまう。

ズンズン

はぁ♡

んんん♡

ハハ♡

「妊婦マンコすごい締め付けてきてっ！
…くうっ♡出すぞ、アニーっ！このまま
お腹の子供に掛けてやるからな」

「うん♡きて、きてえ♡お腹の中の
赤ちゃんにおっさんの遺伝子で
マーキングしてあげてえ♡」

ズグズグ

あああ

んんん





あああ

んんん

ハハハ

「ふあっ♡ああっ♡あはあ♡
赤ちゃんに精液ビチャビチャ
掛けられてうっ♡」
「いけない事なのに気持ちいいの
止まらないよお♡」

びん

本来安定期でも中出しはいけない
のだが。そんなのお構いなしに俺は
おっさんを求める続けた。

親としては失格なのだろうがそれでも
構わないと思っている。お腹の子供には
悪いが俺の優先順位の一番はおっさん
だけなのからだ。











